

06・夢で逢いましょう

とある年の秋。十月二十二日、金曜日。二十二時半ごろ。

『05・初デートで何を着る?』から数時間後。

日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は雨。気温は二十度程度。

天気は晴れ。どうか明日もこのまま晴れであってほしいと、主人公は思っている。

場所は、主人公の自室。

主人公は今、七緒に電話しようとしてスマートフォンを握りしめている。

デートはいよいよ明日。

なので今、直前の挨拶的なものをしたいのである。

しかし、普段この時間帯に電話をかけた事はほとんどない。

さすがに遅いからだ。

先日由希乃が言っていた通り、七緒の母親は、金曜日は基本的に夜間の仕事が休みらしい。

しかし、昼間は昼間でメインの仕事があるそうだ。

だから、そんな仕事で疲れている母親がいる中、のんきに電話をかけるのはどうなのか？と、苦悩しているのである。

そう。あれから主人公は七緒の母親について『検査入院は無事済んだ』という事だけ教えてもらっている。

だが、それ以上の事はよくわからない。七緒はこの件についてとにかくあっさりしており、多くを語らないからだ。

しかし、高確率で家にいると踏んでいいはずだ。だから主人公は悩んでしまう。桐生家の現状が今一つ不明な事が、それに拍車をかけていた。

というか、そんなに悩む位なら、一度『電話していい？』とメッセージアプリで確認してからかければいいのに……それすらできずに、うんうんとうなっている。

——はあ。こういう時もう付き合ってたら、もっと堂々と連絡できるのかな。

確かに告られはしたし、本人の居ないここでは、すっかり浮かれて桐生はわたしの嫁とか、ラブラブとか言ってるけど。

実際には『最近仲良くなったお友達』と変わらない関係だもんなあ。わたし達。

……だけでも今後、わたしが桐生の彼女になればたら。

桐生のお母さんの事とか、聞きたいけど聞けずにいる事を、はっきり聞けるようになる

のかもしれない。

そうだよ。そうなるためにも、わたしは告るの！

だからほら！　がんばれわたし！

今すぐ右上の受話器ボタンをタップして桐生に電話しろ！

と、このように主人公がもだえ苦しんでいると、ふとスマホが点灯した。
七緒からの着信である。

〈主人公〉

「！」

主人公、驚きすぎてスマホをズルっと落としそうになるが、これを何とかキャッチし、
ハアハアと荒い呼吸で握り直す。

まるで変質者だが、よく考えたら二週間前、すでに変質者宣言は済ませていた。
もう、こうなったら堂々で行こう。

そう思いながら、主人公はスワイプして応答する。

▲ ボイス加工あり

「このトラックは全編『電話加工』する」

「以降のセリフにもすべて同じ処理を施す」

「普段通りの声を出そうとしているが、少し暗く、どこか思いつめた様子の声で。

お泊まりをしたトラック03から二週間ほどが経過しており、主人公と七緒はかなり親しくなっている。電話でも何度も話しており、その上明日はデートである。

本来なら『緊張せず、明るい雰囲気で』電話をかけているはずだ。

しかしそうならないのは、七緒の母親が手術する事になり、気分が落ち込んでいるからだ。

七緒の母親は主人公の知る通り検査入院をしていたが、数値が改善せず、入院を延長して手術を行う事となった。

つまり、『検査入院は終わったが、引き続き入院している』状態である。

主人公に嘘はついていないが、隠し事はしているのだ。

手術の日程は月曜日。全身麻酔を使用するので、家族の立ち合いが必要である。

そのため七緒は、月曜日午前中は、学校を休んで立ち会う事になっている。

しかし七緒は、この件を主人公に打ち明けられずにいる。

重苦しい家庭の事情を知られて『面倒くさい女の子だ』『交際したら、苦労が多そうだ』と思われるのが怖いのである。

仮にそうはならなかったとしても、明日のデートで主人公が必要以上に自分を気遣った

り、心配してくれたりするのではないかと思うと、申し訳ない。

しかし、本当は主人公に頼りたい。全部打ち明けて楽になりたい。

だから、できる事なら、主人公から気づいてほしい。

自分からは言い出せなくても。主人公が『なんか元気ないな。どうしたんだ？』と聞いてくれれば、素直に話せる気がするのだ。

そんな期待や、主人公に甘えたい気持ちに『どこか暗い声音』となって表れる」
あ……こんばんは。桐生です」

〈主人公〉

「こんばんは！

……わあ。電話ありがとう。

実はさ、今、こっちからかけようと思ってたんだ」

……よし！ 初手は悪くないぞ！ 人間、素直が一番！

「【驚いて。

照れ屋の主人公が、こうもストレートに好意を表現してくれるとは思わなかったのだ」

……え？

【少し声が震える。嬉しくて、気が緩む。

思わず泣きそうになるが、ぐっとこらえる】
先輩もかけようとしてくれてたんですか？」

〈主人公〉

「うん。だから、すぐ出たる？」

主人公が腹をくくって素直な気持ちを伝えたと、七緒もなんだか嬉しそうにしてくれる。
こんな事を言ったのは初めてだから照れるし、今にも心臓が口から飛び出しそうだが、
うまくいったようだ。

しかし、今度は七緒の声が妙に暗いのが気になる。

もしかして、今日のアルバイト中に何かあったのだろうか……？

「息づかいだけで表現する。大きく息を吸って、涙をこらえる。

主人公の恥ずかしそうな、でもどこか得意げな声が可愛くてたまらない】
……。

【とても嬉しい。その言葉だけでとても救われる。

なので、主人公に甘えなくても耐えられる気がしてくる。

『やっぱり手術の件は、今は黙っていよう。せめて明日、頃合いを見て伝える事にしよう』と方向転換する」

へへ。気が合いますね。私達」

〈主人公〉

「……うん。わたしもそう思う！

で、どうした？ ……なんか桐生、元気じゃないか？

あ！もしかしてまたバイトで変な奴に遭ったのか!!」

「【内心ドキツとしつつ、なんでもない素振りでごまかす。

主人公が心配してくれる事がとても嬉しい。

その気持ちだけで頑張れる気がするので、嘘をつき通す事にする】

え？ あ。いえ、元気ですよ。

【『声疲れてた』とは『声が疲れた印象になっていた』という意味】
今日忙しかったんで、声疲れてたかもですね」

〈主人公〉

「……そうか？ それならいいんだけど……」

主人公、そうは言いつつも、

……そうかなあ。本当に忙しかったっただけなのかなあ。

どう聞いても何だか変なんだけど、桐生の声。

もしかしてまたお母さんに何かあったとか、あの変なクレーマーおばちゃんが来襲したとか。嫌な事があったんじゃないのかなあ。

でも桐生、そういうの言わないもんなあ。

多少仲良くなった今でも、仕事の愚痴とか、困ってる事とか、一切聞かせてくれないんだもん。

クレーマーおばちゃんの時みたいに『慣れてますから』とか思ってさ、我慢させちゃってるんじゃないかなあ。

……確かに、いつも笑顔でいるとか、暗い話はしないとか。

桐生のそういう姿勢は格好いいと思うし、わたしも尊敬してる。

でも、辛い事に慣れるなんて、あっちゃいけないと思うんだ。

ていうかせめて、わたしには話してくれた方がいいんだぜ？

だって、付き合ってはいないけど『よく一緒に過ごしてる友達』ではある訳なんだから、さ。

いやでもそれは、単にわたしが頼りないから、言う気にならないだけなのかも。ああ、もう付き合ってたら、こういう所にもつつこんでいけるのかな……。

と、もやもやの無限ループに突入しかける。

すると、七緒もそれを察したのだろう。

それとなく話題を変えて、明るい方向へ持っていこうとしてくれる。

「それとなく話題を変える。」

都合が悪くなると急に話題転換をするのは、七緒の常套手段になっている」

いよいよ明日ですね。デート♥

遊園地とかほんとずっと行ってないんで、楽しみです」

〈主人公〉

「……うん。わたしもすっげー久しぶり。

特にスイパはずいぶん昔に、家族で行ったつきりなんだよね」

それはとてもありがたい気遣いだが、主人公は喜べない。

たとえば今楽しくない空気になったとしても、自分達は今、もっと話すべき事があるので

はないか。

たとえ七緒がそれを望まなくても。自分はおつと『本当は、何かあったんじゃないのか？』と、食い下がるべきなのではないか。

そう思ったのだ。

〈主人公〉

「桐生は……」

「【少し間をあけてから。

唐突に切り出す。これ以上主人公の声を聴いていると、泣き出しそうになるので】

あの。先輩」

〈主人公〉

「ん？」

だけどその決意は、七緒の唐突な言葉で途切れる。

そういえば、七緒はよくこういう事をする気がする。

ふいに距離を詰めて来たかと思ったら、急に別の話。

その度に主人公は困惑させられて、必死に返事をしているうちに、七緒のペースにのまれるのだ。

初めはそれを、彼女の気まぐれによるものだと捉えていた。

だけど、今は違うように思う。

一見不規則に見える七緒の行動には、実は全部理由や根拠があつて。

だけど主人公はそれに気づかないから、翻弄されるばかり。

そんな気がしてきたのだ。

でも主人公は今、それを掘り下げる勇気がなかった。

たとえば今ここで悪い雰囲気になってしまったら、明日に響いてしまう。

……だったら、明日頃合いを見て聞く方がいいんじゃないのか。

そんな風に、先延ばしを選んでしまう。

このように、主人公と七緒は確かに気が合っていた。

目の前の問題を避けようとするあまり、お互い本当の気持ちを話せずにいたのだ。

「【急に話題を変えた事を申し訳なく思いつつ、続ける。

『電話口で泣き出さないためには、早めに電話を切るのがいい。しかし、今の自分の気持ちは伝えたい』と考えている」

あの。こういうの、行く前に言うのも変なんですけど。

【少し間をあけてから】

私、今回誘ってもらえて。

【声が少し明るくなる。『すっごく』を強調して】
すっごく嬉しいです。

【気分が明るくなってくる。

無理にでも嬉しい事を話しているうちに、気分が高揚してきたので。

七緒は、主人公のついた嘘を信じている。遊園地のチケットも、バス券も、由希乃ではなく、主人公の親戚がプレゼントしてくれたのだと思っている。

つまり『主人公が、自分の意思だけで七緒を誘った』と思っている。
七緒はこれが、ものすごく嬉しい。

誘われたのは土曜日の夜。お泊まりの次の日だった。

なので『あの時、自分がちゃんと気持ちを伝えたから、先輩が信じてくれたのかもしれない。もしかすると、脈があるのかもしれない』と期待し始めている】
チケット下さった先輩のご親戚にも、どうぞよろしくお伝え下さい」

〈主人公〉

「桐生……」

主人公、七緒の言葉に、ずきつと胸が痛くなる。

由希乃と相談して決めた事とはいえ、七緒に嘘をついてしまったからだ。

主人公は、間違った事をしたとは思っていない。

主人公は由希乃の『七緒に、遊びに行く機会を作りたい』という願いに共感したからチケットを受け取った訳だし、そのお礼として、ただで七緒と遊園地に行ける事になった。

だから、由希乃との約束は守るつもりだ。

多少の罪悪感に囚われたからと言って、今から『実は田中さんが……』とねたばらしするつもりはない。

だけど、あまりにも嬉しそうな七緒の声を聴いていたら、後悔が頭をもたげる。

こんな事になる位だったら、あの時安易にイエスと言わずに、由希乃ともう少し話合ってから決めるべきだったのではないか。

それができないのなら、せめて初デートは別の場所で、主人公自身のお金で出かけてから、遊園地に行くべきだったのではないか。

そんな気持ちに沸きあがってきたのだ。

「【照れ笑いして。自分らしくない位はしゃいでいるので、恥ずかしい。

これ以上恥ずかしい姿を見せたり、気が緩んで泣き出してしまいう前に、電話を切ろうと
考えている】

へへ……じゃあ。ほんとにそれだけなんで。
寝ますね♥」

しかし、その道はもう選べない。

こうなった以上は、主人公はこの件をちゃんと隠しきる。その上で、七緒に楽しんでもらう義務があると思うのだ。

そんな事を考えていると、七緒が電話を切ると言い出した。
だが、それはちよつと早すぎる。当然主人公は食い下がった。

〈主人公〉

「え？ もう切っちゃうのか？

せっかくかけてくれたんだし、もう少し話そうぜ」

「【※マークまで、ちよつと甘えた感じで。

親しくなっている証明として『トラック04までは、明らかに存在しなかった』リアクションをする。

自分も主人公と同じように、本当はもっと話したいと思っている事を伝える」
えゝ？ 私だって話したいですよ。

でもね、今日はダメ。

だって、早く寝ないと明日に響いちゃいますもん」※

〈主人公〉

「……！」

……確かに、それはそうかも！

そうだ。すうにも別れ際『当日前に酔い止め飲むのはもちろん、今日も早く寝て下さいね』って、釘さされてたんだった。

主人公、七緒の言葉に同意し、思わずそのまま『そうだな。寝よう！』と言いかける。
しかし、本当にそれでいいのだろうか。

確かに明日の事を思うなら、七緒と涼羽の言う通り、可及的速やかに寝るべきだ。
しかし主人公は今、何か決定的に、すべき事ができていない気がするのだ。

……そうだよ。もし桐生が今何か嫌な気持ちや悲しい気持ちでいて。

でも、それをわたしには言いたくないんなら。

せめてわたしは、桐生が楽しい気持ちで寝れるようにこう……たとえば楽しい提案とか

を、してみるべきなんじゃ、ないのか？

たとえば……たとえば……。

〈主人公〉

「ちゃんと寝とかなないと、バスで酔ったら大変だもんな」

「【ちよつと甘えた感じで】

ね？ 私酔いやすいんで。気を付けなきゃなんです。

【くすくすと嬉しそうに。】

こんな会話をしている事自体が、嬉しくてたまらない」

あーでも、寝られるかなあ。ふふふふ♥」

〈主人公〉

「……あ、そうだ！」

「【きょんととして。主人公が何を言おうとしているのか、見当もつかないので】
ん？」

その時浮かんだのは、ほとんど適当な思い付きだった。

七緒がちよっとでも楽しい気持ちになって、眠りにつけばいい。それだけが理由で目的の、めちやくちやなでたらめだった。

〈主人公〉

「勝負しようぜ。どっちが早く寝られるか！」

そしたら、眠くなくても、寝る気になるだろ？」

「くすくすと嬉しそうに。」

セリフの内容とは裏腹に、うきうきしている。まるで『ぜひ勝負しましょう』『あなたの提案する事なら、私は何でも嬉しいですよ』と言っているかのように話す」

えー？ 何ですかその勝負。早く寝た方が勝ちって。

それ、どうやって勝ち負け決めるんですか？」

〈主人公〉

「……えーっとな。今から寝るだろ？」

だから、話しながらアイデアを練っていた。

「くすくすと嬉しそうに相槌を打つ」
うん」

〈主人公〉

「そしたら、夢見るだろ？」

「くすくすと嬉しそうに相槌を打つ」

うん♡」

〈主人公〉

「そこに相手が出てきたら、勝ち。

それは自分が、相手より先に寝てた。事になるからな！」

理屈もなければ根拠もなく、つじつまも全然あっていない話をしていた。

「くすくすと嬉しそうに。」

もったもな指摘をするが、そんなセリフとは裏腹に、まるで『そのルールで構いません。』

ぜひ勝負しましょう』『あなたの提案する事なら、私は何でも嬉しいですよ』と云っているかのように話す」

えー？ そんなうまく行きます？

ていうか、相手が夢に出てきたら勝ちって、それ逆じゃありませんか？

先に夢の世界に来てる人の方が、先に寝てるって事になる気がするんですけど」

〈主人公〉

「あっ」

それでも、七緒は笑って聞いてくれる。

「くすくすと嬉しそうに。元々、主人公のルールで勝負する気だったので。

主人公が自分のためにこんな無理のある提案をしてくれていると、わかっているのですが、いいですよ。そのルールで行きましょう。」

【少し間をあけてから。

『勝負に対しても、明日のデートに対しても、やる気十分』という感じで】

私、勝ちますからね。絶対先輩の夢を見ます」

主人公のくだらない、口から出まかせに等しい話さえ、矛盾すら理解した上で『いいよ』
と言ってくれる。

こんな時主人公は、自分の存在を丸ごと受け入れてもらっているような気がする。

嬉しくて胸がぎゅっとなるし、そんなにも自分を大切にしてくれる七緒への感謝の気持ちでいっぱいになって。それから……なんだか泣きそうになる。

こんな風に自分を想ってくれるのは、きつと七緒だけだ。

そう確信する。

だから思った。

……わたし、桐生の事、めっちゃ好きだ。

始めは『なんでわたしの事なんか』『人の事からかって遊んでるんじゃないのか』って思
ってたけど。

今は桐生がちゃんと、わたしの中身を見て、わたしって人をいいなって思ってくれたか
ら、こうして一緒に居てくれるんだってわかる。

だから、もし桐生がまだわたしの事好きだと思ってくれてるなら。絶対、絶対付き合
いたい。

そして、桐生がわたしを選んでよかったって思うような、ものすごく幸せなお付き合い
がしたい。

だから……だから……。

わたしは、本気で寝るぞ！

まずは夢の中で桐生を見つけて、絶対、絶対一緒に楽しく過ごすんだ！

「すっかり普段の調子に戻って。

『勝負に対しても、明日のデートに対しても、やる気十分』という感じで」
じゃあもう切りますね。即寝ないと」

〈主人公〉

「おやすみ。じゃあ、明日はよろしくな」

「【上機嫌で。主人公のお陰で、すっかり幸せな気持ちになっている】

はい♥

おやすみなさい。先輩。

じゃーあ。夢で会いましょうね♥」

〈主人公〉

「……おう！」

こうして主人公は『通話終了』をタップした。

それからどう考えても眠れそうにない高揚した気持ちのまま、それでも慌てて、即座に布団に入る。

そして思う。

明日はきつと、最高に楽しい一日になると思う。

桐生の事が大好きなわたしと、こんなわたしを好きだって言ってくれた桐生が一緒に出掛けるんだ。

絶対にいい事ばかりが起きるに決まってる。

だから、一刻も早く眠らなくちゃ――……。と。

と。

ここでフェードアウトして終了。